

一

問一

語の「意味」が、かつて「こころ」という和語で表されていたという事実は、言葉の意味が人の心の動きと結びついて成り立つことを認識させてくれるということ。

（解答欄 3 行）

問二

自然事象は誰にとっても同一のはずだが、それを言語化する際には、無限に多様な事象に、特定の言語構造に応じた恣意的な秩序と形態が与えられるので、いかなる言語も自然事象に対する普遍性を持ちえないということ。

（解答欄 4 行）

問三

漠然たる感情が、できあいの言葉をあてがわれることで、その言葉のもつ特定の意味の枠組の中で把握され、行動や心もその枠組に沿ったものに導かれるということ。

（解答欄 3 行）

問四

意味論は、言語主体から切り離された言葉の意味だけを客観的な対象としてきたが、言葉が人の認識や感情を規定する面はあるものの、むしろ言葉の意味は時代の中でそれを用いる人の感情によって変わりゆくものであり、言葉と人の心の関係こそが問われねばならないから。

（解答欄 5 行）

三

問一

科学も文学も、人間活動の発展の結果として存立すると同時に、事実のもとをなす個人的体験を他者と共有すべく忠実に表現しようとする点において共通しているから。
（解答欄3行）

問二

芸術的価値は、個々人の最も生彩に富んだ絶対的経験に根ざし、体験の法則化を目指す科学では把握できないから。
（解答欄2行）

問三

事実を明証しつつ法則を定立する科学は、発展の途上で方法の枠外にある様々な人間固有の経験を捨象せざるをえないが、その限界を自覚することで、人間の他の営みと相補い人類の全面的な進歩に貢献すべきものとしてある。
（解答欄4行）

三

問一

草の葉も吹きわたる香ばしい風になびくように、身分の低い人々も藩主の徳政に素直に従って、

(解答欄 2 行)

問二

改易処分に伴い江戸や京をさすらって二年後に再び熊本へ戻ってきた宗因も、熊本に留まっていた宗因の親兄弟や親しい人たちも、改易以降のつらい日々は、お互いに言葉にできないほどひどいものであったということ。

(解答欄 4 行)

問三

ここに留まることのできる手がかりもなく、これから先のことといっても決めている事もないけれど、見知らぬ土地では我が身を恥じることもないだろう。

(解答欄は 4 行設けられているが解答は 3 行で十分書けるものである)